2023年度活水女子大学入学式　式辞

学長　広瀬　訓

活水女子大学に入学された新入生の皆さん、入学おめでとうございます。ご家族並びに関係する皆様方、父母会および同窓会の方々にもご列席を賜り心より感謝を申し上げます。

こうして、まだ多少の制限があるとはいえ、以前のように入学式を行うことができることは、喜びに堪えません。今日入学を迎えるみなさんのほとんどは、コロナ感染の下、これまで何かと不自由な毎日を過ごしてきたのではないかと思います。コロナウィルスの感染拡大により、私たちの生活は大きな変化を余儀なくされました。私たちが「当たり前」だと思っていた日常が、ウィルスという、人間の目には見えない、小さな存在によって大きく揺り動かされることになってしまったのです。私たちは、今日までは当たり前のはずだった毎日が、明日も続くとは限らないことを、身をもって体験しました。そして、コロナ前にはほとんど経験したことのなかったオンライン授業や在宅勤務に多くの時間を費やすことになった人も少なくないはずです。

その経験から学んだことは、自分を取り巻く社会の変化に適切に対応してゆくことの重要性です。生物学では、環境の変化を乗り越えて生き延びることのできる生物は、それまで強さを誇った種ではなく、環境に適応して自分を変えることのできる種類の生物だと言います。異なる環境に対応できる柔軟性こそが、変化の激しい現代を生きる上で必須の能力だと言っても良いでしょう。

しかし、柔軟性とは、時代に流されて、根無し草のように生きるということではありません。本当の柔軟性とは、柳の枝や竹のように、しっかりと太い幹につながり、地面に根を生やしてこそなりたつものです。聖書の言葉を借りるならば、「ブドウの木の枝」となります。揺らがない幹、揺らがない根っこがあって、初めて自分を守りながら風にそよぐことができるのです。活水女子大学の土台には、創立者のエリザベス・ラッセル先生が据えられたキリスト教の精神があります。それは一言でいえば、「愛と寛容」の精神だと私は思います。私たち一人一人が、みな神様に似たものとして創られたことを考えるならば、他人を、そして自分をも「神様に似た」存在として尊重し、愛することができるでしょう。また、神様という絶対的な存在の前に、自分の未熟さ、いたらなさを顧みることができれば、それは本当の意味での謙虚さと、自分とは異なる考え、自分とは異なる人々を受け入れる寛容さを育むことになるはずです。みなさんひとりひとりが、この大学で、144年前から脈々と受け継がれてきた、変わらない建学の精神を土台に、社会の中で柔軟に対応していけるような能力を身につけてくれることを期待しています。

活水女子大学の主役は、みなさん、学生ひとりひとりです。私がもっとも強くみなさんに願っていることは、一人でも多くの学生が、叶うならばこの大学で学ぶすべての学生が、「活水女子大学で学んでよかった」と思ってくださることです。私たち教員、職員もそんな学生

生活を支えたいと、日々努力しています。

　みなさんのこれからの学生生活が、実り豊かで、喜びに満ちたものになるように、主のお導きと、お守りとがありますようにお祈りいたします。

　これをもって学長の式辞といたします。